

戦時宣伝ピラ研究の文献解題

山 本 明

I

第二次大戦は全世界的な思想戦であった。それは、基本的性格としては、ファシズム対民主主義の闘いではあったが、その内部には、帝国主義諸国間の矛盾、民族独立戦争、資本主義対社会主義の矛盾などを内包していた。こうした第二次大戦は必然的に思想戦であり、したがって、宣伝戦の色彩を強くしていた。

思想戦であり宣伝戦であるために、あらゆるメディアが動員され、国内宣伝活動はもちろん、敵にたいしても、宣伝が行われた。その第一が電波、第二が印刷物、とくにピラであった。第二次大戦の六年間に、おそらく数十億枚のピラが散布されただろう。このピラは、前線用としては、降服を勧告するもの、脱走をすすめるもの、戦況を知らせるもの、厭戦的気持をかきたてるものなどあり、後方もしくは敵本国用としては、降服勧告、反乱示唆、戦意低下、戦況ニュースなど、各種ある。また戦場が植民地の場合、

植民地住民用がある。

こうしたピラは、ことが戦争にかかわることだけに、どの国も真剣にとりくんだ。したがって今日からみると、歴史学、社会学、コミュニケーション論、思想史のための貴重な資料となっている。私がこうしたものに関心をいだく一つの理由は、ピラを制作した国が相手国を文化的、イデオロギーにどのように見ていたかを考えるためである。そこには、相手国の国民性や日常生活イデオロギーについての偏見やステロ・タイプの認識もみられる。

また、ピラは、相手国の兵士、一般人に読ませるためのものであるが、面白いことに、そこには必ず制作者側の文化やイデオロギーが反映している。つまり、ピラは制作者側の鏡という側面も持っている。右のように、戦時宣伝ピラは、戦争という側面も持つ事柄に附属しているものではあるけれども、イデオロギー研究にとって、きわめて興味ぶかい資料である。

ところが、これまで日本では、戦時宣伝ピラについての研究は、

まったく行われていない。また、資料も多くない。そこで私は、最近、鈴木明氏と太平洋戦争関係の宣伝、ビラを蒐集し、そのうちいくらかを『謀略宣伝ビラ』（一九七七年講談社刊）にまとめ、また、ビラのイデオロギーについては、「戦時宣伝ビラのイデオロギー」（『展望』一九七八年一月号より三月号に連載）で、問題点の若干にふれた。もちろん、これらは、まだ不十分なもので、今後の研究にまたねばならないものが多い。そこで、ここでは、これまでの戦時宣伝、ビラについての研究および資料について、私の知るかぎりのことを紹介しておくことにする。

心理戦争一般についての研究書の数は多くない。新しいもので、Charles Reutter, "Psychological Warfare," London, 1974, がそれである。本書では、むしろプロパガンダ政策についてのべながら、ポスター、ビラについてもふれている。ビラ研究はたんにビラを対象とするだけでなく、他の媒体の研究も必要であるから、この種の研究の意義は大いにある。ただし、本書もそうであるが、この種の研究の大かたが、「実用書」である。つまり、プロパガンダ専門家のために執筆されており、資料的価値は高くても、前節でのべたような私たちの問題意識からは、ほど遠い。

第二次大戦のプロパガンダ、とくにビラに多くのページをさいたものには Paul M. A. Lineberger, "Psychological Warfare," New York 1948, が有名で、以前に邦訳もされた（須磨弥吉郎訳『心理戦争』みすず書房一九五三年。ただし、訳文は生硬で読みにくいし、原本の中に挿入されている図版のいくつかは収録され

ていない）。著者は、アメリカ陸軍の心理作戦専門家であり、第二次大戦中はこの部門の極東責任者となり、一九四三年いらい、主として重慶で活躍した。本書の特徴は、戦時中のアメリカの心理作戦の組織と、主として極東における実践を詳細に記述していることにある。図版の中には、太平洋戦争でアメリカ軍が日本軍に撤布したビラの中でもっとも有名な絵物語「運賃無蔵」の全ページ写真版のほか、多数のビラが入っている。このジャンルの研究では、無視できぬ本である。

これまで、プロパガンダ研究の対象は、ポスター、映画に限定したものがほとんどで、それぞれについては、龐大な研究書が刊行されている。ところが、近年では、プロパガンダ研究の対象にビラを加えるようになってきた。たとえば Anthony Rhodes, "Propaganda, the art of persuasion: world war II," London, 1976, は、戦時ポスター、郵便切手、映画、グラフ雑誌のほか戦時宣伝ビラについてもふれている。近年刊行されたプロパガンダ資料としては、これがかつとも詳しい。

第二次大戦のヨーロッパ戦線における宣伝ビラについて、全般的に記述された本は、いまのところ、みあたらない。とくに一九四一年十二月にはじまるソビエト軍の攻勢にはじまり、一九四五年のベルリン突入までの期間、独ソ両軍はおびただしいビラが撤布したが、これについては、専門書がない。一九三九年九月に開始された英・仏対独の戦争は、ドイツのポーランド侵攻が一月で終了して以後、翌四〇年五月のドイツの西部進撃まで、海上に

戦時宣伝ビラ研究の文献解題

おける通商破壊戦をのぞいて、陸上戦は全く停止していた。「奇妙な戦争」(Phony War)とよばれる由縁である。この時期に、イギリス空軍は夜間にドイツ上空に侵入し、おびたらしいビラを撒いた。それはドイツ国民がヒトラーに反抗して立ち上ることを期待したものが、ほとんど効果がなかった。これについては、Nicholas Bethell, "The War Hitler Won," London, 1972. に詳しい。ビラも凸版刷りで紹介されている。

太平洋戦争におけるビラは、日本側が撒布したものの、連合国側によるものの両方がある。日本側のものについては、全般的には『日本週報』誌一九五九年六月四日付臨時増刊所収の「未公開・戦時伝単大特集」が詳しい。ここには、一九四一年、四二年に日本陸軍参謀本部が作製した対マレー、インド、ガダルカナル、オーストラリア、ビルマなどのビラのほか、アメリカ空軍が日本本土に撒いたビラも収められ、ビラ作製にたずさわった日本人の座談会や回顧録も収録されている。これまでのところ、日本のビラ作製関係者による証言は、これしかない。この特集の記述によると、参謀本部は太平洋戦争初期に対ソ戦用のビラも作製していたとのことである。だが、これまでその種のビラが発表されたことはない。

これにたいして、連合国側が日本軍および日本国民に撒布したビラについての記録は、多くはないが、いくつかある。まず、アメリカ軍については、海軍の作製者の一人オーティス・ケリーが『日本の若い者』(日比谷出版社一九五〇年刊)および『日本開

眼』(法政大学出版局一九五二年刊、のちに加筆されて『よこ糸のない日本』サイマル出版会一九七六年として再刊)を書いている。ハワイにおける日本人捕虜を使つてのビラ作製および「マリアナ時報」刊行のいきさつに詳しい。ハワイの捕虜収容所におけるビラ作りについては、上前淳一郎『太平洋の生還者』(文芸春秋一九七六年刊)がドクメンタリー風に綴っている。

オーストラリアからフィリピン、沖縄と攻めのぼってきたマッカーサー麾下のアメリカ陸軍は、オーストラリアのプレスバインでビラを製作したが、同時に、現地でも応急のビラを作っている。これについては、鈴木明「日本兵を泣かせた毛筆の謀略ビラ」(『文芸春秋』一九七七年一〇月号所収)が、日本語の堪能なオーストラリア人バビアの活動を中心に記述している。

アメリカ在住日本人で、アメリカ軍の対日ビラ製作にたずさわった日本人、二世の数は少なくない。しかし、この人達の記録はほとんどない。その一つに、八島太郎「日本降服勧告の尖兵として」(『文芸春秋』一九六二年二月号所収)がある。筆者は一九二〇年代後半に日本プロレタリア美術同盟で活躍し、一九三九年、亡命同様のかたちでアメリカに移った。彼は開戦後、アメリカ本土でビラをつくった。前述の『運賃無蔵』はその一つである。一九四五年五月にアメリカ軍情報部員としてインドにわたり、「無所属兵士新聞」を製作した。この新聞の、紙面はいままで公表されたことはない。

一九四五年に入ると、サイパンのB29による内地爆撃が激しく

なる。どのようなビラが国民の頭上に降ってきたかは、ここ数年間に各地で大衆的に編集、発行された空襲の記録集に記述がみられる。とくに「東京大空襲・戦災誌」編集委員会編『東京大空襲・戦災誌』第三巻（同会刊一九七三年）には、日本側の報告として「米空軍ノ撤布セル宣伝ビラニ関スル概況」をはじめ、多くのビラの写真版が収録されている。

本土空襲についてのアメリカ側の基本的文献は『アメリカ合衆国戦略爆撃調査団報告書』の第四部「日本人の戦意に及ぼした戦略爆撃の影響」である。これは、ワシントンDCの国立公文書館に所蔵されているが、その一部は、邦訳されている。第四部を構成する全一〇章のうち、第三章「米国の対日宣伝」、第七章「空襲の予告」は、前記の『東京大空襲・戦災誌』第三巻に収録され、第一章「宣伝による戦意の統制」は、横浜市・横浜空襲を記録する会編『横浜の空襲と戦災』第四巻「外国資料編」（一九七七年刊）に収められている。この報告は、アメリカ側の記録のほか、戦後に日本の官庁が調査団に提出した報告文書および日本市民にたいする面接調査を土台として書かれている。

日本内地で撤布されたビラは、いくつもの本の中で写真版によって紹介されている。その主なものをかかておこう、『大日本帝国陸海軍——軍装と装備』（サンケイ新聞社出版局一九七三年刊）、「雄鶏通信」臨時増刊『初めて公開された東京大空襲秘録写真集』（雄鶏社一九五三年刊）、「太平洋戦争の『紙爆弾』、伝単とはこれだ』（『週刊現代』一九七七年二月二二日号）、富永謙吾

戦時宣伝ビラ研究の文献解題

『大本営発表の真相史』（自由国民社一九七〇年刊）、『一億人の昭和史』「空襲」（毎日新聞社一九七七年刊）、『昭和日本史』第八巻「終戦の秘録」（既教育図書刊）。

ビルマ・インドにおけるイギリス軍の対日本兵、ビラの多くは、在米日本人で明治の社会主義者岡繁樹を中心に製作された。岡については、岡直樹・塩田庄兵衛・藤原彰編『祖国を敵として——在米日本人の反戦運動』（明治文献刊一九六五年）に詳しい。本書は、岡繁樹が一九五〇年に執筆した「私は売国奴か——売国奴の烙印を押された人間の記録」（『文芸春秋』一九五〇年五月号所収）を中心に編纂されている。これが岡繁樹についての唯一の本である。なお、本書には、ビルマ戦線で撤布された英中軍のビラや週刊「軍陣新聞」および「軍陣新聞・前戦版」のいくつかの写真および文章がおさめられている。また、米軍情報部による月刊「戦陣ニュース」とビラの類も、ごく一部であるが掲載されている。

太平洋戦争中、もっとも特異でかつ効果的な反戦運動を展開したのは、中国における中国共産党。第八路軍および日本反戦同盟のちの日本人解放聯盟であった。彼らの活動は、日本帝国主義が日中人民の共同の敵であると規定したうえで、日本兵士が日本帝国主義とその手先きである将校にたいして抵抗すること、兵士が軍隊から脱走して反戦組織に加わること、および兵士の軍隊内での日常要求を支持することなどを綱領とした。その活動は、ビラに限らず、拡声器による日本軍トーチカへのよびかけ、手紙、プ

戦時宣伝ピラ研究の文献解題

レゼントなど多様な活動を行なった。

重慶にあった鹿地亘関係のものは、次のものに記述がある。鹿地亘『日本兵士の反戦運動』上下(同成社、一九六二年刊)、同『反戦資料』(同成社一九六一年刊)、同『中国の十年』(時事通信社一九五八年刊)、反戦同盟記録編集委員会編『反戦兵士物語』(日本共産党出版部一九六一年刊)。鹿地とは異なる部署ではあるが、同じく重慶にいた青山和夫については、青山和夫『反戦政略』(三崎書房一九七二年刊)がある。

同じ頃、延安における野坂参三や日本人解放聯盟の活動については、『野坂参三選集』戦時編(日本共産党中央委員会出版部一九六二年刊)に詳しい。また、同時期に延安で発行されていた『解放日報』紙上には、日本人の反戦運動について多くの記事、論説がある。これらの翻訳は太平洋戦争史研究会の手によって刊行されている。『華北における日本兵の反戦運動』一、二(非売品、一九七四年、七五年刊)。最近書かれたものとしては、大森実『戦後秘史』第三卷「祖国革命工作」(講談社一九七五年刊)がある。日中戦争初期の一九三八年三月、中国国民革命軍の飛行機二台が、熊本県、宮崎県に飛来し、大量のピラを撒布した。これは「日本労働者諸君に告ぐ」「日本農民大衆に告ぐ」「日本工商業者に告ぐ」などの表題で、日本軍閥の戦争計画に反対をよびかけたものである。これは、前述の鹿地亘『日本兵士の反戦運動』第一巻に紹介されている。

当時の日中両軍のピラについては、ほとんど資料がない。とく

に、現物およびその写真は少ない。私を知るかぎりでは、鹿地亘の本のほか、一九三八年に内閣情報部主催で「思想戦展覧会」がもよおされ、『思想戦展覧会記録図鑑』が刊行された。この中に、日中両方のピラの写真が収録されている。

朝鮮戦争では、朝・中軍と米・韓軍とともに大軍のピラを撒布した。これについての文献は全くない。なお、アメリカ軍製作のピラは、当時の米軍後方基地である日本で製作された可能性が高いが、これについての資料もない。

ベトナム戦争でも、大量のピラが使われたが、その一部は本多勝一『ベトナムの村から』(朝日新聞社一九六九年刊)に写真入りで紹介されている。

II

戦時宣伝ピラについての季刊の専門雑誌が“Falling Leaf”と一九五五年からイギリスで発行されている。発行はPaywar Society。正式名称は「心理戦争史家および飛行機によって撒布された宣伝ピラの蒐集家の国際協会」である。

この雑誌は、十九世紀から現在までの、あらゆる飛行機撒布政治宣伝ピラを対象とし、その発見、紹介および分類整理に努めている。主としてヨーロッパ戦線のものが多いが、アジアのものである。朝鮮戦争、ベトナム戦争はもちろん、フィリピンの「ゲリラ」討伐戦に使用されたもの、中国から台湾へ風船によって送られたものなどの新種もその都度紹介されている。また本誌の別冊

として、いくつものカタログが発行されてきた。たとえば、「ドイツがフランスに撤布したビラ一九三一年——四〇年」とか、「V1ロケットによってイギリスに撤布されたビラ」といったように、地域別、年代別のカタログである。ただし、写真は入っていないから、このカタログだけでは、詳細はつかめない。

雑誌としては、やはりイギリスで発行されている「The Aero Field」が、航空に関する文書、郵便切手などとともに戦時宣伝ビラについてもページをさいている。

以上のように、戦時宣伝ビラに関する文献は多くない。とくに、ビラを捨得した側の記録にとぼしい。これが明らかにされないかぎり、ビラ研究の意義は全くといっていいほどないと考える。また、日本人捕虜による新聞・ビラ作製の過程についても、まだまだ全貌は明かにされていない。今後の研究がまたれる。